

渡邊洪基先生にまつわるノート

大橋 秀雄

profile

おお はし ひで お
大 橋 秀 雄
昭和 6 年 5 月 10 日生



略歴

東京生まれ。昭和19年都立第四中学校(現戸山高校)に入学直後、父北京で戦病死、陸軍中将。「跡を継いで立派な軍人になりなさい」と母にいわれ、翌年4月東京陸軍幼年学校(西八王子)に入学、8月敗戦、即廃校。敗残兵姿で父の郷里、新潟県の山村に疎開していた母の元に帰る。

地元の県立村松高校卒業、東京大学理科一類入学。昭和29年工学部機械工学科を卒業し、石川島重工業(現IHI)に入社。5年在籍し、そのうち2年間ドイツ政府留学生とし渡独、Dr.-Ing.の学位を得て帰国。昭和34年東京大学に移籍し、講師、助教授、教授として33年間工学部機械工学科で教育と研究に従事。専門は流体工学。平成4年3月定年退職、東京大学名誉教授。

同年4月から工学院大学教授、平成6年から9年間学長を務める。平成15年3月退職、工学院大学名誉教授。同年4月から平成23年3月まで学校法人工学院大学理事長、以降顧問として現在に至り、妻と静かに暮らす。子供男二人、孫男三人。

校祖渡邊洪基先生の経歴や業績については、伝記本を始めとして、本会報でも多く語られてきた。125周年を目前に控えた本号の短い紙面では、あえて的を絞り、ノートに書き留めるような断片を通じて、校祖のお姿を描き出してみたい。

生まれ年

校祖は、弘化4年、1847年生まれとされている。私も学生・生徒諸君に校祖を紹介するとき、そのように伝えてきた。昨年、瀧井一博氏が本学で「忘れられた知の巨人～渡邊洪基の生涯～」と題して講演されたとき、校祖を1848生まれと紹介された。はっとした私は、瀧井先生にその疑問をぶつけてみて、始めて気付いた。校祖は大晦日も近い12月23日生まれである。当時はもちろん旧暦で、明治5年になって、その年の12月3日が新暦の明治6年(1873年)1月1日に切り替えられた。弘化4年の大部分は1847年であるが、12月3日から31日までは1848年である。校祖は新暦では1月生まれであるが、実際には年の瀬も慌ただしい最中に生まれた。受け止め方もかなり違う。年号の疑問は解けたが、旧暦の日本史を西暦で表現するときの落とし穴を改めて思い知った。

初代総長

校祖が初代総長を務めた帝国大学は、その歴史の中で様々な名前を変えてきた。明治10年創設の東京大学に端を発し、明治19年の帝国大学令に基づいて工部大学校を併合し、五つの分科大学からなる帝国大学に改組された。それが明治30年に東京帝国大学、昭和22年に東京大学と名を変えて今日に至っている。問題は、始めと終わりが同じ名前では区別がつかないことにある。最初の東京大学は加藤弘之が総理を務め、



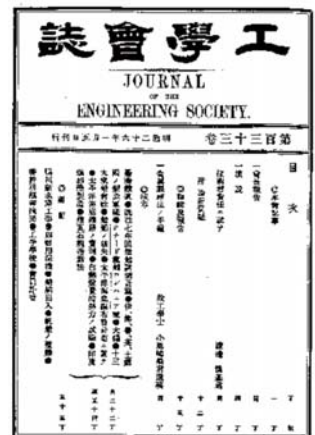
帝国大学総長 5代目まで

帝国大学になって渡邊洪基が総長に任命された。

東京大学の初代は誰かと問われるとき、混乱が生まれる。学者の頭目であった加藤と、政治任命の渡邊、初代の栄誉をめぐる応援団が分かれたことは想像に難くない。しかし、法令に基づきわが国初の総合大学(当時唯一)として誕生した帝国大学の初代総長は、紛れもなくわが校祖である。

学医匙回らず

校祖は、明治25年11月工学会の通常総会で「技術者責任に就いて」と題する講演*を行った。これが我が国で技術者倫理に言及した最初のケースと見なされており、欧米でEngineering Ethicsが問題となり始めた1910年代より20年も先駆けていた。この意味で、校祖は日本はおろか、世界のパイオニアといえる。その中で、校祖は「学医匙回らず」という格言を使って技術者を戒めている。知識だけの医者では処方すらできない。同様に、知識だけの技術者では設計図も引けない。



処方とは知識に基づき判断を総合した決断の結果である。設計図も、同様に判断と決断の結晶である。「工学士線引けず」では使いものにならない。高い責任感で判断と決断を下す。これが技術者倫理の根幹であるから、校祖の適切な喩えに改めて感服する。

科学技術

これまで、科学技術とは科学 and 技術なのか、それとも一体なのか意見が様々であった。最近では、科学・技術と科学技術が使い分けられるようになってきた。科学・技術は文字通り科学 and 技術、科学技術は科学に立脚した技術である。Engineering は Science based Technology と定義されるから、科学技術はエンジニアリングそのものである。校祖は明治19年東京化学会で行った講演*の中で、「技術は理化（現在の科学）に基盤をおかなければ発展性がない」といって、技術と科学は無縁であるとされていた当時の常識を覆す発言をしている。技術を学ぶものは科学や数学の基礎を固めなければならない。この基礎重視の技術教育が工手学校以来の伝統となっている。ここにおいても、わが校祖は際だった先見思想の持ち主である。



日本画家渡辺玉花

校祖は、長年連れ添った妻貞子との間で子供に恵まれなかった。貞子の没後、洪基は53歳のとき松子と再婚したが、やがて待望の懐妊の知らせがもたらされた。そのとき校祖は病の床に伏せていたが、その喜びはどんなに大きかったことか。無事に生まれた娘は貞子と名付けられたが、校祖はその後わずか一ヶ月でこの世を去った。際どいタイミングだったが、校祖の血を引く唯一の子孫が残された。

貞子は10歳から日本画を学び、川合玉堂門下の山内多門、大和絵の吉村忠夫らに師事して研鑽を重ねた。昭和4年帝展で初入選して以来、総理大臣賞、文部大臣奨励賞などの受賞を重ね、玉花の画号で日本画家として名を成した。源氏物語に題材する色彩豊かで叙情的な絵が、とくによく知られている。

新宿校舎のアトリウムで、父洪基の胸像が並ぶ壇を左側に降りると、仏像を刺繍する平安女性を描いた120号の大作**が目にとまる。もちろん玉花の作品で、まさに親子の共演である。そのほか、本学には合計14幅の玉花作品が散在しており、無機的な新宿校舎の雰囲気にも、まさに花を添えている。絵には、玉花の署名と、倭多奈遍の4文字を刻んだ落款が押されている。

理事会が開催される高層棟28階の役員会議室にも、源氏物語の「花の宴」に題材をとった大作が架かっている。光源氏と朧月夜の姫の別れの場面を描いたもので、物語の中でも圧巻の情景である。理事長席に座ってその絵と向かい合い、心の中で「堅いばかりが能じゃない」と呟きながらも、ひたすら手堅い経営に励んだ8年間だった。私にとって思い出深い一幅である。

注* いずれも、日本近代思想大系（岩波）第14巻に収録されている。

注** 学園創立50周年のお祝いに寄贈された。



玉花作品 繡仏（アトリウム）



花の宴（役員会議室）